

# 少女

渡辺温

青空文庫



井深君という青年が赤坂の溜池通りを散歩している。

これは一昔若しくはもつと古い話である。今時の世の中にこんな種類の青年を考えることはあまりふさわしくない。

中山<sup>ダービー</sup>帽子をかぶって、縁とりのモオニング・コートを着て、太い籐<sup>ステッキ</sup>の杖を持って、そして口にはダンヒルのマドロス・パイプを銜えている。これが井深君の散歩姿である。

井深君は銀座の散歩の続きか、或は活動写真を見た帰りか何かで、その春の夕暮れ時、あの物静かな通りを赤坂見附の方に向けて、当もなくただ一人でぶらぶら歩いていたものと見える。日が落ちたばかりで、水浅黄色の空の底には黄昏の薄明りが未だ消え

きらなかつたのに、月は早い月なのでもう可なり上つていた。一体、あすこいら辺はガラアチだとか倉庫みたいなものばかりあつて、灯影ひかげが割合に乏しく、道を歩く人もわけて日暮れ頃なぞには少いのだが、その夕方はどうしたものか井深君はたつた一人も、兎に角自分の体の付近にはたつた一つの人影をも見ることが出来なかつたのである。勿論車道の方には時折電車も通れば自動車も疾つていたが、併しその電車や自動車の内側の明るい光や乗客の姿は、無心にたあいもなく走り去つてしまうので、一人の生きた人間の数にも入らなかつた。車道は何の係りもない別の世界で、電車にしろ自動車にしろ暗がりの幕の上に映つた活動写真みたいに、全く少しの音もたてずにひっそりと動いているようにさえ思

えた。そこで、その薄暗い山王下あたりへ続くまことに寂しい並木のある磴石道を、うしろから青つぽい靄をふくんだ月の光に照らされながら歩いているうちに、井深君は何時しかそんな場合に似合わしい気分しあはれに落ち入って行つたのである。

と云つたところで、井深君は未だ少年の域を脱け切らない年頃ではない。毎日々々のらくらしているばかりで何一つ為事しごとらしいものも持つてはいなかつたが、それでも立派な法学士で——そんな肩書などは全くどうでもいいのだが——兎に角三十歳近い大人であつた。併し、時々、少年になろうと云う意識は動いた。それと云うのが、井深君は恰度恋愛をしていた。それも——井深君は殊の外内気な性向たちで、かつ多分それ故に謹直で、ついぞ遊びもし

ないし、酒も飲まないし、女の噂さえも滅多に口にするものな  
い人間なのだが、どう云う事のはずみか井深君が屢々遊びに行く  
友だちの妹で、やっと十八位にしかならない少女に生まれてない  
恋慕の情を覚えそめていたのである。恋慕の情を覚えそめていた  
——と云うだけの話だから、その少女の方ではどんな風感じて  
いたのかも判らない。甚だもの果無い恋愛<sup>はかな</sup>である。井深君自身も  
そう思った。が、井深君の氣質にしてみれば、そして又別の恋も  
知らずに三十歳もの年を重ねてしまった身に見れば、それ程  
のもの果無い恋の方がいつそ心に叶っていたのではあるまいか：  
。。

井深君は、自分のひきずっているステッキが盤石にカラカラ、

カラカラと鳴る音ばかりではもの足りない気がした。そこで、あらためて前後左右を見返して、人影のないのを確かめると、さて――（何しろ春の黄昏で、月がさしていたことだし……）と心の裡に言いわけをして、その少女が好んで唄っている「汝が像」と云うハイネの詩にシューバートが曲をつけた歌を口笛で吹いてみた。

[Ich stand in dunkeln Tra:ummen und]

start, ihr Bildness an,

Und das gelibte Antlitz

hoimlich zu leben begann.

.....

.....

ところが、一章唄い切らない中に井深君はやめた。

行くての向う側の家並に切れ目が見えて、つまり横通りがあつて、其処の角の赤と緑との明るい灯がついている下に何やら人々がごたごたとたかっているのである。色のついた灯は Owl Grill

& Restaurant と大きく切り抜いた西洋料理店の軒燈であつた。お

や——喧嘩かな。アウル・グリル・エンド・レストラントか？

上海にいた時分には、あすこへよく飯を食いに行つたものだったが……と、井深君は、平常ならば銀座の真中で土地の人気者たちの大喧嘩があつて、どんなに黒山の人だからがしていたにしろ、足をとめたりなぞしないのだが、その晩に限つてどうしたわけか、その大袈裟な軒燈につられたものか、つい電車道を横切つて、そ

つちの方へ近寄ってみたのであった。その西洋料理店は名前こそ堂々としていたが、もとよりペンキ臭い安普請のけちな店構えであつた。植木会社の貨物らしい大きな糸杉の植木を飾つた入口の仏蘭西扉の前に十人位の者が立つて中を覗き込んでいた。仏蘭西扉の傍には、何のつもりか舶来の酒の壇や前菜料理の材料なぞと一緒に大きくふくらましたゴム風船の沢山浮んでいる。見世飾シヨウウイन्दがあつて、それらの透き間から垣間見ている者もいた。

—— 帰れ！ やい、けえれねえのか、てめえ宿なしじゃあるめえな！」

先ずだみた男の声でそう怒鳴るのが井深君の耳に入った。井深君も人々の後から内部の出来事をうかがつた。井深君は人並より

丈が高かったので、溝板か何かを足場にして少し背延びをするとすつかり見ることが出来た。井深君は入口に近い卓テーブル子の一つに顔を伏せている小ぎつぱりした空色の水兵服を着て赤い飾り玉のついた仏蘭西様の水兵帽をかぶった十七八の少女と、その傍に立つて二人の女給らしい、ひどくまるまると肥って赤ら顔の女と、それとまるであべこべに痩せこけて蒼い女と、それに主人とも見える背広服を着て頭の頂をてかてかに禿げ上らせた男とを見た。

——あんた、泣いたって、泣き真似なんかいくらしたって、誰あれも可哀相だなんて思やしなくってよ。早くお帰んなさいよ。」と肥った女が云った。

なる程、安物の置電燈スタンドのうす紫の笠シェイドの下で、水兵帽子の赤い玉

のかすかに揺れているのがわかった。

——交番へそう云うじやなし、帰ってもいいなんて、有難いと思わないのかね。いけ洒々と泣いて見せたりしやがったって、そんな手なんかに乗って堪るかってんだ、ほんとうに。足元の明るいうちに、さっさと帰れ、帰れ！」と今度は痩せた女が、そう罵ると、見物の方を向いて晒って見せた。

——足許はとつくに暗えや、日が暮れてるぞ！ 帰る家がなかったら俺ん家へ来い。ただで泊めてやらあな。」と見物の一人が怒鳴った。それで、見物人たちは、一斉に笑い出した。

——全くしぶとい小娘だ。服装なこそちゃんといい服装なりをしているんだが、不良少女なんて凶々しいもんだな。」と主人らしいの

が感心したように云った。

すると、水兵服の娘は突然顔を上げて井深君を見たのである。恰も井深君が其処に見物人たちの後から覗き込んでいるのをはつきり知っていたかのように。——（けれども、部屋の中は明るくて戸外は暗いのみだから、井深君の方では見たと思つても先方では見えなかつたかも知れない。まして井深君が其場に居合せたことに気の付こう道理なぞはないのだが、何しろあまり突然に、ぴつたり二人の眼が出会つたのだ）青ざめて、眼が先の広がった睫毛まで涙に輝いて、可愛らしい輪廓をもつた顔である。井深君は、そこで危く声を上げようとする程驚いた。突然見つめられたためばかりではない。井深君は、実に其処に自分の恋渡つてゐる少女

と他ならぬ少女を見出したのである。——いやいや、こんな風  
に不器用な云い廻しは決して許されない。第一それではこの話は話  
にならなくなってしまう……。上品な額や、花きやしやおとがい車な頤や、さて  
は振分け髪を一束づつ載せた細りとした肩のあたりと云い、瓜二  
つどころか全く豆と豆との如くと云つても足りない位である。こ  
んなにもよく似た顔が二つ以上も、この世に存在して差聞えない  
ものであろうか！ と井深君は思った。

井深君は知らず識らず人々の一番前に出てしまった。そして、  
どうして井深君にそんな敢為な志が湧き起こったのであろうか、  
それはただその少女があまりにも自分の恋人にそっくりであった  
から——と云う理由だけに過ぎない。井深君はその頭の禿げ抜け

た主人らしい男に事の顛末を訊ねたのである。頭の禿げた男は井深君の中山帽子やその他の身なりに対して敬意を表しながら可なり丁寧の説明して聞かせた。その少女は夕食のために定食を食べたのだが、食べてしまうと、金入れを紛失なくしたと云って代を払わなかったと云うのである。

——二円？ それ位の金で、こんな年のいかなのお嬢さんにこんな恥をかかせるものではない。僕が払いましょう。」井深君は話が存外やさしい事柄であつたのに安心しながら云つた。

——あなたさま、お知り合いでいらつしやいますか？」

——そう、まあ知り合いですね。……江戸川の立派なお邸のお嬢さんだよ、お父さんは男爵でね。電話をかけましょう。——君

は不良少女なぞと云ったことを、勿論みんなの前でお詫びする気でしようね。」

井深君は、この少女の身元を証明するために本物の恋人の兄のところへ電話をかけよう、そしてあとで訳を云ってあやまればいと思つたのである。井深君はこの思いつきに嬉しくなつて水兵服の少女の方をみた。しかし、少女は井深君と顔を合せることを恐れでもしているように、部屋の隅つこの方へ体を向けて顔をふせていた。

——モシモシ、園田男爵ですか、園田君いますか、こちら井深です。ええ井深。……ああ園田君、今ね、赤坂見附で妹さんと——ああちえ子さんとお会いしたんだがね。これからすぐ送つて帰

るよ。さよなら、くわしい事はあとで話すよ、さよなら……」と井深君は相手の声は何を云おうとお構いなしに、大きな声でおつかぶせるようにそれだけしやべってすぐ電話を切った。

果して、その電話のおかげで、主人や女給はひどく申訳のないような顔をしてひたあやまりに、井深君と水兵服の少女とにあやまるし、入口に立っていた野次馬もこそそとそれぞれ散らばってしまった。

ところでさて、井深君はその水兵服の少女を連れて其処を出なければならなかった。中山帽をかぶってステッキをついた紳士と空色の水兵服を着た少女とは、やがて赤坂見附の方へ、うす暗い歩道を歩いて行つた。月は今は真上から静かにさしかけていた。

——君、どうして、あんなところへ入ってご飯を食べなければならなかったの？」と二人つきりになると、そんな少女に対しても井深君は固くなって口をきいた。

——あたし、でも、おなかが空いたんですもの。虎の門の裏でお友達とテニスをしたのよ……」と甘えるような声で少女は答えた。何てしやあしやあしていることだろう——と井深君は思った。しかし、まあなんてその声までが、そっくり自分の恋人そのままであることよ——と感嘆した。そして、もしも、あのようなところで遇ったのではなくして、はじめから、恋人と二人で此処を散歩していたものとしたならば、（——何と云う幸福な仮想であろう！）自分は決してこの少女が、自分の恋人と別人かも知れない

なぞと云う疑をさえ差し挟まなかったのだが……それにしても、なぜこんななまでによく似た人間が二人もいるものであろう、恐しい事だ——

——君、家で食べればいいじゃないか。君の家どこ？」

——ご存じのくせに……」

——どうして？ 僕知るもんか。」と井深君はドギマギとして云った。

——あら、だって、さつき電話をおかけになったでしょう。」

——電話だって？ あれは君をたすけるための出鱈目さ。」

——ああら、どうして出鱈目なんか仰有るの。」

——どうしてって、その方が君のためなもの。」

「……………」

——君の名前はなんて云うの？」

——ソノダチエ子。どうしてきくのイブカさん。」

——止したまえ！　ふざけるのにも程がある。電話まで聞きのがさない。」

純良な青年の井深君は、不良少女と云うものは実におそるべきものであると感じた。井深君はそれで黙ってしまった。姿や声はこれ程よく相似ているのにも拘らず、どうして一方にはこんな末恐しい少女が育てられて来たのであろうか。外にあらわれているところが似ているように、心だつて屹度、生まれた時は素直な上品な子だったに違いなかつたのだらうに——井深君は境遇や周囲

の不良少女に及ぼす影響に就いて、法学士らしく考えてみたりした。

——君はどっちへ帰るの。」と井深君は立止ってきいた。

——それは小石川よ、どうしてそんな判り切ったことをきくの？ イブカさん……」と水兵服の少女は、もうすっかり晴れやかな様子になっていて、井深君の腕につかまり乍ら一層甘えるような声で云った。井深君はあたりを見廻した。

——ばか、ばかなことを云うのはお止し。そして、いい子にならなくてはいけない……ねえ、わかったかい……じゃあ、さよなら……」と云うと、いきなり、その水兵服の少女を抱きしめて強く接吻した。そしてすぐ、はるかに平河町の方から坂を下ってく

る電車をめがけて後をも見ずに駈け出した。

ところが、その翌朝のこと、園田の声で電話がかかった。

（——井深君、井深君。昨晚は妹がとんだ厄介になつて、どうも有難う。あいつはお転婆だからね、いい薬だったろうよ。それでも、妹は君がとても親切にしてくれていい人だつて、ひどく喜んでいたよ——）と云うのである。井深君はそれで、三十分も電話の前に黙つて立ちつくしていた。

——僕はなぜ、はじめ見た瞬間に、その空色の水兵服の少女が、園田の妹に（似ている——）なぞと思つてしまったのでしょうかね、わかりませんよ。なぜ、園田の妹だ、とすなおに思わなかつたのでしょうかね、全くわかりませんよ。——僕は人間の、しか

も自分自身の目でも耳でも頭でも、あんまり信用出来ないものだ  
と、しみじみ思いましたね……」

と云う井深君の話である。

# 青空文庫情報

底本：「アンドロギュノスの裔」 薔薇十字社

1970（昭和45）年9月1日初版発行

初出：「三田文芸陣」1925年11月号

入力：森下祐行

校正：もりみつじゅんじ

1999年5月14日公開

2007年11月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 少女 渡辺温

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>